

鹿児島医セン

鹿児島医療センター(心臓病・脳卒中・がん専門施設)

2022.8

vol.196

東京都臨時医療施設 立ち上げについて報告

新型コロナウイルスの流行第6波拡大に伴い、東京都に臨時の医療施設を開設することとなりました。私は臨時医療施設の立ち上げメンバーとして、3月1日～4月8日の約5週間東京に派遣されましたので、活動についてご報告いたします。

<東京都臨時医療施設の概要>

開設者(委託者): 東京都知事

運営管理(受託者): 独立行政法人国立病院機構 理事長

設置場所: 国立病院機構東京病院敷地内にプレハブ建設

医療施設の管理者: 東京病院院長

運営病床: 80床(40床×2病棟)

受入患者: 軽症～中等症、疑似症

人員配置: 全国の国立病院から職員を派遣

運営開始日: 令和4年3月10日(木曜日)



3月1日、コアメンバーである師長、副師長、看護スタッフの計8名が集結し、本部からの指令を受けました。指令内容は、「3月10日に開院できるように必要な準備を行い、必要とされる物品を洗い出す」というものでした。この日プレハブはまだ建設中であり、施設に立ち入ることができず、隣の東京病院に場所をお借りして準備開始となりました。「必要な準備」とは、業務手順の作成、施設のレイアウト作成、電子カルテ操作マニュアル作成、多職種との連携方法、薬品や物品の定数決定、入院患者さま向けの資料作成など多岐に渡りました。私たちコアメンバーは途方に暮れる間もなく、自然に役割分担を行い淡々と業務を進めました。3月7日、やっとプレハブでの作業が開始となり、病室・ナースステーションの物品配置やゾーニングを行った後、その日の午後に多職種で入院患者の受け入れについてシミュレーションを行いました。もちろん1日ではうまく進まなかったため、翌日も設営や多職種での話し合いを繰り返しました。3月9日午後に全国から43名の看護スタッフが集結したので、オリエンテーションを実施し、3月10日の開院に無事こぎつけることが出来ました。土日も挟んだため、実質7日間で、ゼロから開院準備を行ったこととなります。

<ナースステーション>



物品配置前



物品配置後

<病室>



物品配置前



物品配置後

いざ開院すると多くの問題に直面し、私たちが作成した業務手順は部分的に「机上の空論」であったと気付かされ、毎日修正を余儀なくされました。また、入院患者さまの多くは施設のクラスターで感染した認知症や知的障害の方だったため、徘徊したり、環境の変化に馴染めず興奮されたりと、コロナ感染の治療だけにとどまらない対応が必要とされました。さらに、プレハブならではの問題もあり、外気温はそれほど高くなくとも日差しにより病室内の温度が上昇したため、飲水を促すなどの脱水症対策が必要でした。また、高齢の患者さんが10日間病室にいることで日常生活機能が低下することも考えられたので、看護師と行うリハビリも取り入れました。



▲入院受入の様子



▲病棟内を看護師とリハビリ中

私の役割として、患者さまとスタッフの安全を守ることは大前提ですが、全国から集結したスタッフが「派遣に来て良かった、また派遣に行きたい。」と思えるような環境づくりにもこだわりました。業務内容は可能な限りシンプルに、見える化し、慣れない環境に不安を感じているスタッフに寄り添うよう心がけました。幸い、全国から優秀なスタッフが選ばれて派遣されていたため、私自身がスタッフに助けられることもあり、私のミッションはそつなく達成できたように思います。



▲臨時医療施設(プレハブ)に物品を搬入している様子

今回の派遣はかなりタイトなスケジュールでした。そのため、何故ここまでできたのかコアメンバーと振り返ることがあります。まずは、本部の指令が的確であり自分たちの役割が明確であったこと。本部や師長さんが私たちコアメンバーに決定権をくださったこと。そして、国内最大級のネットワークを有した国立病院機構が豊富な人材を集めたことが成功への糸口であったと思います。

私自身、普段は心臓血管外科のJNP(ナース・プラクティショナー)としてコロナとは関係のない部署で働いていますが、今回の派遣により色々な意味で成長できたように思います。今回の経験を何らかの形で還元したいと考えております。派遣に際しお世話になった方々、派遣に選んでくださった院長や看護部長に深くお礼を申し上げます。また、新型コロナウイルス感染拡大により苦しんでいる方々が早く救われますようにお祈りいたします。

(文責：心臓血管外科診療看護師(JNP：ナース・プラクティショナー) 伊藤 由加)



▲本部の方とコアメンバー



▲全国から集まったスタッフと一緒に

診療科紹介

— 泌尿器科 —

泌尿器科の川平秀一郎です。

当院の泌尿器科常勤医が徐々に減っており（2019年度までは3人、2020年度より2人、2022年度より1人）、皆様には大変ご迷惑をおかけしております。

私は2020年4月より赴任致しました。当時の泌尿器科部長の宮元医師と共に、常勤医は減ってもそれ以前と同様の医療提供を心がけようと、外来、手術症例はなるべく維持すべく努力してまいりましたが、やはり1人となってしまうと、業務、特に手術については縮小せざるを得ない現状があります。

具体的には、泌尿器医が2人以上必要な手術（前立腺全摘出術、膀胱全摘出術、腎臓（尿管）摘出術、仙骨腔固定術等）は行わず、1人で完結できる手術（経尿道的手術（膀胱腫瘍、前立腺）、前立腺生検、腎瘻・膀胱瘻造設、陰嚢水腫等の小手術）のみ行っています。

外来診察、処置、検査については特に制限は設けておらず、以前と変わりありません。火曜日のみ午前から手術日で休診、月、水、木、金曜日の午前に外来を行っています。初診も以前と同様ですが緊急性がない方の場合は前日までに予約センター経由での外来予約を行って頂けると診察がスムーズです。緊急の患者さまのご紹介も頂いており可能な限り対応したいと思っておりますが、手術中や他患者対応中などで受けられない場合もありますので、ご理解頂きたいと思っております。

当科及び腎臓内科で血液透析を行っています。維持透析は行わず他疾患で当院入院している期間の臨時透析のみです。

研修医、及び診療看護師の研修を受け入れており、手術、処置、検査を一緒に行っています。優秀な方が多く、専門外の知識については彼らから教えてもらい自分自身をアップデートしている状況です。日々の業務においても貴重な戦力として働いて頂いております。

至らない点も多々あるとは思いますが、皆様のお力になれるよう努力していきますので今後ともよろしくお願い致します。

（文責：泌尿器科医長 川平 秀一郎）

新任紹介



血液内科

鎌田 勇平

7月より鹿児島大学病院から血液内科へ赴任しました。鹿児島医療センターでの勤務は初期研修医の時に数か月間研修して以来10数年ぶりです（当時は血液内科と第2循環器科で研修していました）。自分は研究が好きで臨床をしながらこれまで、多発性骨髄腫やTリンパ腫関連の仕事をしてきました。最近は運動不足解消のためバレーボールにも手を出しています。不慣れな点が多くご迷惑をおかけすると思いますが、しっかりと頑張っていきたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。



婦人科 レジデント

甲斐 美帆

7月より鹿児島大学病院から当院婦人科に赴任しました、甲斐（旧姓：橘）と申します。初期研修医の際には第二循環器内科で2か月間お世話になり、ご縁あってこの度は婦人科医として勤務させていただくことになりました。子供が小さいため、様々な面でご迷惑おかけしてしまうかと存じますが、皆様のお力添えを賜りますと大変有難く存じます。日々精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



脳神経外科

増田 圭亮

7月1日から前任の渡邊先生に代わってお世話になります、脳神経外科6年目の増田圭亮（ますだけいすけ）です。中途半端な時期からの赴任となってしまう、皆様にご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、精一杯務めて参りますので何卒よろしくお願い申し上げます。



皮膚腫瘍科・皮膚科

佐々木 奈津子

前任地の北九州の産業医科大学より来ました。皮膚悪性腫瘍は希少がんに分類されるものもあり、治療法にはまだ確立されていないことも多く、さらなる進歩が求められている分野です。鹿児島から日本や世界へと発信を続けているこの医局で微力ながらも力になりたく、希望して赴任しました。精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

■お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター（心臓病・脳卒中・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

（代）TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <https://kagomc.hosp.go.jp/>

メディカルサポートセンター

地域連携室専用FAX▶099(223)1177

※休日・時間外は当直者で対応します。

